

# 舟岡古墳

附 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査

2005年12月

香川県香川町教育委員会

## 例　　言

- 1 本報告書は、賃入住宅改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書で、香川県香川郡香川町浅野 253-1 および 255-2 番地に所在する舟岡古墳の試掘調査報告を収録した。また、合わせて香川町立浅野小学校に保管されている万塚古墳・劍山古墳等の出土遺物についても調査した。
- 2 試掘調査および整理作業については、香川町教育委員会が実施し、高松市教育委員会が協力した。
- 3 事業費は、香川町が全額を負担した。
- 4 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)  
香川県教育委員会、香川県文化財保護協会、香川町立浅野小学校  
井上勝之、上原敏紳、中原耕男、信里芳紀、御厨義道、向井郁夫、山下平重
- 5 舟岡古墳の調査は、下記のとおり実施した。  
【試掘調査】 平成17年9月1日～2日  
　　香川町教育委員会 社会教育課 係長 中原裕二  
　　高松市教育委員会 文化部文化振興課 文化財専門員 川畠聰  
【整理作業】 平成17年9月5日～10月31日  
　　発掘調査と同じ
- 6 本報告書の執筆・編集は、第1章を中原、第2～5章を川畠が担当した。
- 7 本報告書掲載遺物の写真撮影は、高松市教育委員会 文化部文化振興課 文化財専門員 大嶋和則が担当した。ただし、図版7-10-15、浅野八王子古墳出土遺物は、町教委の遺物管理アルバムのものを使用した。
- 8 本文の挿図として、国土地理院発行5万分の1地形図「高松南部」および香川町都市計画図2千5百分の1「香川町都市計画図 No.3」を一部改変して使用した。
- 9 本報告書の高度値は、海拔高を表す。第2・11図の方位は真北を表し、他の図面の方位は磁北を表す。
- 10 卷末の「万塚古墳発掘調査報告」「香川町浅野八王子古墳調査報告」は、香川県文化財保護協会発行の『文化財協会報』から転載した。ただし、図面については再トレースするとともに、写真については掲載していない。また、明らかな誤字や誤植については修正した。

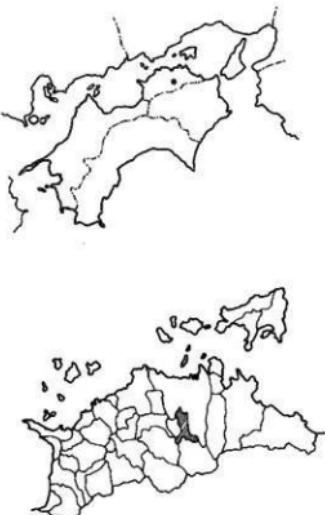
# 目 次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査の経過	3
第3節 調査後の経過	3
第2章 地理的環境・歴史的環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	
第1節 調査前の状況	6
第2節 調査の概要	7
第3節 墳 丘	8
第4節 埋葬主体部	8
第4章 まとめ	
第1節 古墳の年代	9
第2節 舟岡古墳と香川町内の後期古墳	9
第3節 舟岡古墳周辺の調査について	10
第4節 (伝)舟岡出土の舟形石棺について	10
第5章 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査	
第1節 万塚古墳出土遺物	11
第2節 剣山古墳出土遺物	14
第3節 出土地不明遺物	17
第4節 下赤坂出土遺物	18

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成17年8月に、舟岡古墳の地権者より、個人住宅改築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の照会が香川町教育委員会にあった。工事の内容は、車両用進入路を新設するため、古墳から南に伸びている低い盛土を除去するというものであった。当町教育委員会では、工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから、地権者に文化財保護法第93条に基づく発掘届出を香川県教委に提出していくこととともに、香川県教委および地権者と協議を行った結果、平成17年9月に包蔵地の性格を把握するために試掘調査を実施することになった。なお、香川町教育委員会には文化財専門員が不在のため、高松市教育委員会から文化財専門員派遣の協力を受けた。



第1図 香川町位置図

### 第2節 調査の経過

試掘調査は、平成17年9月1日～2日にかけて実施した。調査は、工事予定地である墳丘から南側の盛土にかけて、南北約9mのトレンチを設定し、重機による機械掘削を実施した。その結果、南側盛土は江戸時代以降のものであることが明らかになるとともに、墳丘の一部が工事予定地に含まれることが判明した。トレンチ壁面の土層図を作成するとともに、写真撮影を行い、トレンチの一部を埋め戻した。また、墳丘東斜面には石室の一部と考えられる川原石の石積みが露出していたため、東斜面を人力により精査し、石積みの検出作業を実施した。その結果、東西方向の横穴式石室であることが判明し、当古墳が古墳時代後期のものであることが明らかになった。検出した範囲で石室の実測図を作成するとともに、写真撮影を行い、石室石積みを土のう袋によって養生することにより崩落回避の措置をとった。さらに、墳丘および南側盛土を対象にした平板測量を実施した。

### 第3節 調査後の経過

試掘調査の結果、工事予定範囲に墳丘の一部が含まれることから、香川県教委の指導により、工事中の立会を平成17年9月3日に行なった。工事中に、墳丘の一部が想定通り露出したものの、それ以外の遺構・遺物とも確認されなかった。

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

香川町は、香川県のほぼ中央に位置すると同時に、地形的に見れば高松平野の南端部にあたる。そのため、香川町の北部は平野沖積地帯、南部は阿讃山脈から連なる丘陵地帯となっている。この高松平野は、香川町の西端を南北に流れる香東川によって形成された扇状地で、東西20km・南北16kmの規模をもつ。一方、阿讃山脈を縫うように流れてきた香東川は、丘陵地帯が切れる部分から北流し、瀬戸内海へと注ぎ込んでいる。

舟岡古墳は、阿讃山脈縁辺に形成された独立丘陵である舟岡山東側の平地に立地し、香東川の東側に位置する。標高は55m前後である。

### 第2節 歴史的環境

香川町では、現在のところ、旧石器・縄文時代の遺跡や遺物は発見されていない。

弥生時代でも、明確な遺跡はまだ発見されていないが、舟岡山や新池で石庵丁や石鎌が採集されている。さらに、香川町の西側に位置する香南町では、弥生時代後期の集落跡である岡清水遺跡が所在することから、これから香川町でも弥生時代の遺跡が発見される可能性は高い。

古墳時代になると、明確に遺跡が認められるようになる。前期では、双方中円墳または前方後円墳と考えられている舟岡山古墳が独立丘陵上に築かれ、ここから特殊器台片が出土している。また、浅野小学校では、舟岡周辺から出土したと伝えられる剣拔式石棺が保管されており、前期～中期のものである。

古墳時代でも後期後半になると、横穴式石室をもった古墳が多く築かれるようになる。香川町内の中央から北東部にかけての独立丘陵上に、万塚古墳・八王子古墳・東赤坂古墳（町指定史跡）・横岡山古墳（町指定史跡）などが築かれている。一方、丘陵上とは違い、舟岡山東側の平地では、今回報告する舟岡古墳が所在している。

古代の香川町は旧香川郡に属し、町内の北半部は大野郷に、南半部は井原郷に比定されている。香川郡には秦氏が多く居住していたことが、平城京から出土した木簡などから窺い知ることができる。しかし、今のところ古代の遺跡は発見されていない。

中世になると、香川町内でも武士階級の城館が築かれる。香東川流域の平野部には、大野北城・大野南城・龍満城・乾城・箭造城が所在している。さらに、高松空港南側の山間部には鳥屋城がある。香川町以外では、香東川西岸の平野部に由佐城・行業城などがあり、南部の山間部には山城である音川城・東谷城などがある。

近世になると、讃岐国（香川県）は生駒親正によって統治される。生駒家が4代で転封となった後は、香川町を含む讃岐国東部は、松平頼重が初代となった高松藩に属し、明治維新を迎えることとなる。

#### 《参考文献》

香川町教育委員会『龍満城跡』2000年

香川町教育委員会『龍満山古墳群～1号墳～』2003年

香川町誌編集委員会『香川町誌』1993年

香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

『国道193号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡』2001年



1 龍勝山古墳群	16 穴野面古墳	31 龍満城跡	46 鳥原城跡
2 石舟池古墳群	17 万塚古墳	32 吉光城跡	47 音谷城跡
3 三谷石舟古墳	18 八王子古墳	33 佐賀神社古墳	48 東谷城跡
4 三谷城跡	19 東赤坂古墳	34 池内城跡	49 好広城跡
5 通谷遺跡	20 百相坂遺跡	35 横井城跡	50 神内城跡
6 三谷三郎池西岸窓跡	21 舟岡山古墳	36 山佐城跡	51 円養寺遺跡
7 平石上1号墳	22 舟岡古墳	37 乾城跡	52 向井山城跡
8 平石上2号墳	23 大野北城跡	38 箭造城跡	53 猪野城跡
9 平石上3号墳	24 大野南城跡	39 行柔城跡	54 本村古墳群
10 小日山1号墳	25 中田井城跡	40 四絆城跡	55 大龜古墳群
11 小日山2号墳	26 若宮神社古墳	41 高野神社古墳	56 尾越古墳
12 日山山頂古墳	27 刺山古墳	42 茶園窓跡	57 上佐山城跡
13 北山古墳群	28 横岡山古墳	43 大坪窓跡	58 中山田遺跡
14 雨山南遺跡	29 清谷古墳群	44 城所山1・2号墳	59 中山田古墳群
15 雨山南古墳群	30 油山古墳群	45 阿清水遺跡	60 上佐山東麓古墳

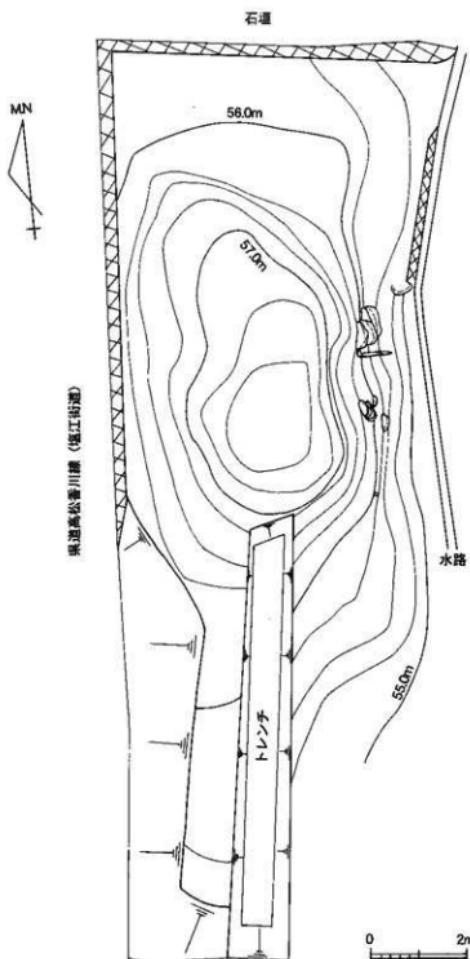
第2図 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/50,000)

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 調査前の状況(第3回)

舟岡古墳は、高松平野を南北に流れる香東川から東へ約1.8 km離れた平地にあり、標高は約55 mを測る。舟岡古墳の北西には、標高86 mの独立丘陵である舟岡山があり、西には溜池である舟岡池が水を湛えている。古墳と池の間にあら浅野出水からは豊富な水が湧出しており、下流域の水田を潤している。かつては、この地域ものどかな田園地帯であったが、市街化の波が押し寄せている。

調査前の古墳墳丘は、南北約11 m、東西約6～7 m、高さ約2.5 mの不整な長方形で、東北西の三方に土留め用の石垣が造られている。さらに墳丘南側には、南北約8 m、東西約3 mの盛土が取り付いていた。墳丘西側に隣接して、県道高松香川線(塩江街道、旧国道193号線)が南北に走っており、拡幅工事等によって墳丘の一部が削られたようで、石垣は西側が高さ約1 mともっとも高い。反対側の墳丘東側は、家屋に隣接しており、こちらも墳丘が大きく削られたために急傾斜となっている。この急傾斜である東側斜面には、石室の一部と考えられる川原石の石積みが露出していた。墳丘上面は、若干の低木と雑草によって覆われていた。

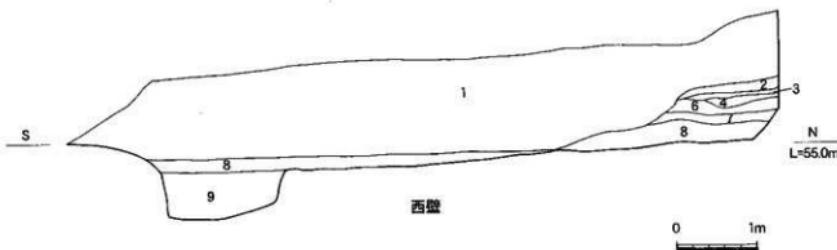


第3図 墳丘測量図(縮尺1/100)

## 第2節 調査の概要(第4図)

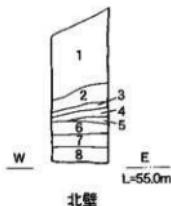
調査は、工事により駐車される予定である墳丘南側の盛土に、南北約9m、東西約1mのトレンチを設定し、重機による機械鏟削を実施した。掘削深度は、工事により削平されるレベル(西側隣道の標高)までとしたが、一部において地盤を調査するために深く掘削している。その結果、トレンチ北端から南へ約1.3mの範囲において、墳丘の一部と考えられる版築された盛土を確認した。第2~6層がこれに該当し、第7層以下が表土層・地山に相当する。一方、南側盛土を形成していた第1層は、江戸時代以降の瓦・陶磁器を含むことから、古墳とは関係がない後世のものであることが判明した。

トレンチ調査と並行して、古墳の内容を把握するため、墳丘東斜面を人力により精査し、石積みの検出作業を実施した。作業は、石積みが墳丘奥まで続いているかを確認するため、石の小口面を描えている南側を掘削するとともに、その対となる石積みを確認するための精査であった。その結果、露出していいた石積みが横穴式石室の北側壁であり、それと対をなす南側壁と考えられる石積みも確認することができた。これにより、舟岡古墳は、東西方向の幅約1.5mを測る小型の横穴式石室をもつことが判明した。



### 土層名

- 1 黒褐色 (5YR5/1) ~ 黒褐色 (5YR2/1) 細砂 (盛土、瓦・陶磁器を含む)
- 2 淡黄色 (2.5YB8/3) シルト質極細砂 (堅い、墳丘・版築)
- 3 黑褐色 (10YR6/1) シルト質極細砂 (堅い、墳丘・版築)
- 4 淡黄色 (2.5YB8/3) シルト質極細砂 (堅い、第6層をブロック状に含む、墳丘・版築)
- 5 にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト質極細砂 (堅い、墳丘・版築)
- 6 黑褐色 (10YR6/1) シルト質極細砂 (堅い、墳丘・版築)
- 7 反黄褐色 (10YR4/2) シルト質極細砂 (古墳築造時の表土層)
- 8 淡黄色 (5YB8/3) シルト質極細砂 (地山)
- 9 黑褐色 (10YR3/1) 砂礫 (5~15cmの礫を多く含む)



第4図 トレンチ断面図 (縮尺1/60)

### 第3節 墳丘(第3・4図)

墳丘は、第1節で報告したとおり削平が著しく、原型を留めていない。また、墳丘南側のトレンチ調査でも、周溝は確認されておらず、検出した墳端も本来のものであるかどうかは分からぬ。そのため、規模・形とも不明であるが、墳丘東側が大きく削平されていることから、石室が露出している付近を中心と仮定した場合、復元される規模は約10mとなる。他の古墳と比較して小規模であるが、現時点では10m以上の規模をもつ墳丘としか言及できない。なお、墳丘の高さは、県道およびトレンチ内の地山からいずれも現況で約2.65mを測る。

さて、トレンチ壁面で確認した墳丘断面観察では、版築により堅く締めた墳丘であることが分かる。第4図第2～6層が相当し、地山である淡黄色シルト質極細砂と、地山に何かを混入したと想定される褐灰色シルト質極細砂の互層によって、墳丘が構成されている。

### 第4節 埋葬主体部(第5図)

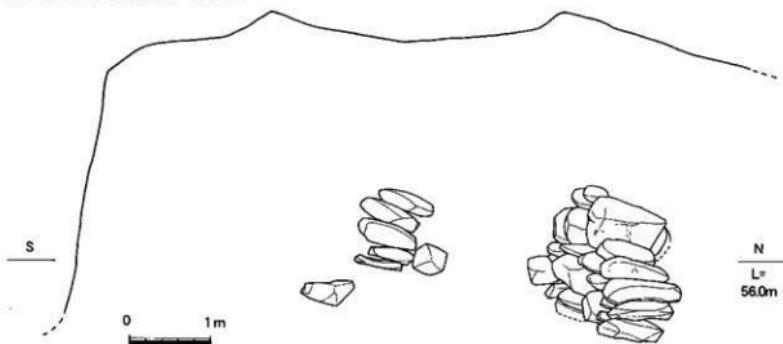
墳丘東側斜面を精査したところ、地山から約60cm上を床面として、川原石の石積みが約1.5mの間をおいて相対することから、この石積みを側壁とした横穴式石室と判断した。石室の主軸は、N-100°-W前後を測ることから概ね東西方向を向いているが、開口方向は不明である。石室東側のみならず上部も失われており、石室の残存状況は良くない。なお、現状保存を前提としているため、精査に伴う掘削は小範囲に限られたものである。

石積みは、やや細長い川原石を使用しており、石材の小口側を石室内面に向けて揃えている。北側壁は、5～6段で高さ約90cmの石積みが残り、奥行きは3～4列で約1m分を検出したが更に奥へ続いている。南側壁は、1列分しか検出していないが、基底石近くの石1個と、内側に傾き倒れ掛かっている石列を確認した。石材の種類は、砂岩がほとんどだが、花崗岩や安山岩も少數認められる。これら石材は、香東川付近から調達されたものと推定される。

墓壙等は、掘削範囲が限られていたため、今回の調査では確認できなかった。床面には、敷石等は認められず、墳丘と同じ堅く締めたシルト質極細砂である。



石室北側壁立面図



第5図 墳丘東斜面における石室検出状況図(縮尺1/30)

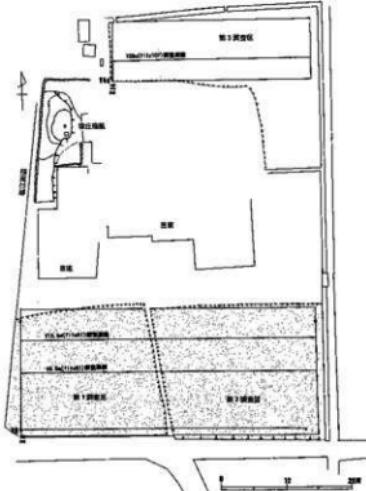
## 第4章 まとめ

### 第1節 古墳の年代

出土遺物がないため、詳細な年代特定は困難であるが、横穴式石室の特徴から類推してみたい。川原石を主体にして石室を構築する特徴は、龍満山1号墳の石室と共通している。どちらも香東川の東側に立地し、両墳は約2kmの比較的至近距離にあることから、何らかの関係があったものと類推される。ただし、龍満山1号墳の石室は比較的大きい花崗岩も使用しているが、舟岡古墳は現状では小振りの川原石のみであること、石室幅も龍満山1号墳が舟岡古墳より大きいことといった相違点が指摘できる。これが、時期差を反映しているのか、龍満山1号墳が独立丘陵斜面に立地するという石材確保の差異を反映しているのか即断できない。いずれにせよ、両者は時期的に近いものと考えられる。龍満山1号墳からは、大阪府陶邑編年（田辺1981）のTK209～TK217古段階の須恵器が出土し（香川町教委2003）。7世紀前半の築造時期が想定されており、舟岡古墳も同じ頃に築造されたと考えられる。いわゆる古墳時代後期後半にあたる。

### 第2節 舟岡古墳と香川町内の後期古墳

舟岡古墳は、前述のとおり石室が川原石積みであることを最大の特徴とし、龍満山1号墳と共に通している。この石材の選択が、香東川に起因することについても述べたとおりである。一方、香川町内と縁辺に所在する他の横穴式石室墳（東赤坂古墳、横岡山古墳、八王子古墳、万塚古墳）を概観すると、丘陵上にあり、石室構築にあたっては花崗岩を主体的に用い、部分的に川原石を使用している。両者を比較することにより、石材の相違について考察を加えてみたい。まず、古墳間の距離を見た場合、舟岡古墳と龍満山1号墳は約2kmに対し、舟岡古墳と八王子・万塚古墳は約1km、龍満山1号墳と横岡山古墳はわずか350mであり、距離によるとは考えられない。次に出土遺物が分かっている龍満山1号墳と万塚古墳を比べた場合、万塚古墳がやや古いが、大きな時期差は認められない。石室規模を比較した場合、舟岡古墳を除いて、東赤坂古墳、龍満山1号墳、八王子古墳、万塚古墳となるが、石室規模が起因しているとは考えられない。以上のことから、石室石材の相違は、築造の時期差が可能性としてあるものの、大きくは香東川から近い距離にあることに起因するもの（横岡山古墳は龍満山1号墳から近いが香東川に面しない）と考えられる。また、古墳を築造した集団の居住域も香東川に近いことから、日々の生活や精神に香東川が関与していた可能性も考えられる。



第6図 舟岡古墳周辺平面図（上原敏紳 2001 から）

### 第3節 舟岡古墳周辺の調査について

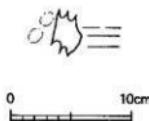
現在、舟岡古墳は単独で所在するが、一般的な後期古墳は群集していることから、舟岡古墳周辺にも他の後期古墳があった可能性がある。実際、舟岡古墳南側の水田（第6図）で実施されたレーダー探査およびボーリング調査によって、古墳が存在した可能性が指摘されている（上原2001）。調査結果によれば、周溝をもつ直径17～18mの円墳が存在し、舟岡古墳と合わせて2基以上で構成される古墳群が存在したと想定されている。今回の調査で、舟岡古墳の時期が後期後半となつたことから、後期古墳群が存在した可能性は高くなつたと考えられる。

### 第4節（伝）舟岡出土の舟形石棺について

現在、浅野小学校に保管されている舟形石棺は、もともと舟岡古墳周辺に水槽として利用されていたもので、そのため石棺の小口や造り付けの枕が削り取られている。この石棺の本来の出土地については、かねてから舟岡山の上にある舟岡山古墳（前方後円墳or双方中円墳）または平野部にある舟岡古墳といわれていた。しかしながら、今回の調査によって舟岡古墳が後期の横穴式石室をもつことから、舟岡古墳から石棺が出土した可能性はなくなつた。一方、船岡山古墳についても、特殊器台が出土している可能性があること、墳丘が低いことを考えると、古墳時代前期前半の古墳となり、前期末～中期初頭の年代観をもつ石棺とは年代が一致しない。現段階では、浅野小学校保管の石棺は、舟岡山古墳と舟岡古墳の両方ともに出土した可能性は非常に低いと考えられる。

さらに、この石棺については、上原敏紳氏によって若干の考察と追跡調査が最近行われている（上原2001）。氏によれば、舟岡山が江戸時代末期から明治時代初頭に石切場として利用されていたことが、石棺が舟岡山古墳から出土したという誤認を生むとともに、舟岡古墳周辺で実施したレーダー探査結果から舟岡古墳出土の可能性も否定している。今回の調査によって、その考えが補強されることになる。

それでは、舟形石棺はどこから出土したのであろうか。ここで、上原氏が舟岡古墳丘から表探した円筒埴輪片を報告したい。摩滅が著しい細片だが、円筒埴輪のタガをもつ破片である。細片であるため、調整は不明で、正確な直径は復元できないが、比較的直径の大きい個体と考えられる。埴輪の詳細な時期は不明であるが、もちろん舟岡古墳の横穴式石室とは年代が合わない。この円筒埴輪を石棺と安易に結びつけることはできないが、関係を否定する材料も現在のところ見つからない。ここでは、舟岡古墳周辺に円筒埴輪をもつ時期の古墳がかつて存在し、そこから石棺が出土した可能性もあることを指摘するにとどめたい。



第7図 舟岡古墳表探円筒埴輪実測図（縮尺1/4）

### 《参考文献》

- 上原敏紳 2001『香川県香川町船岡古墳および周辺遺跡』『墳丘のない墓の探査研究』天理大学遺跡探査チーム  
香川町教育委員会 2003『龍満山古墳群～1号墳～』  
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

## 第5章 万塚古墳・劍山古墳等出土遺物の調査

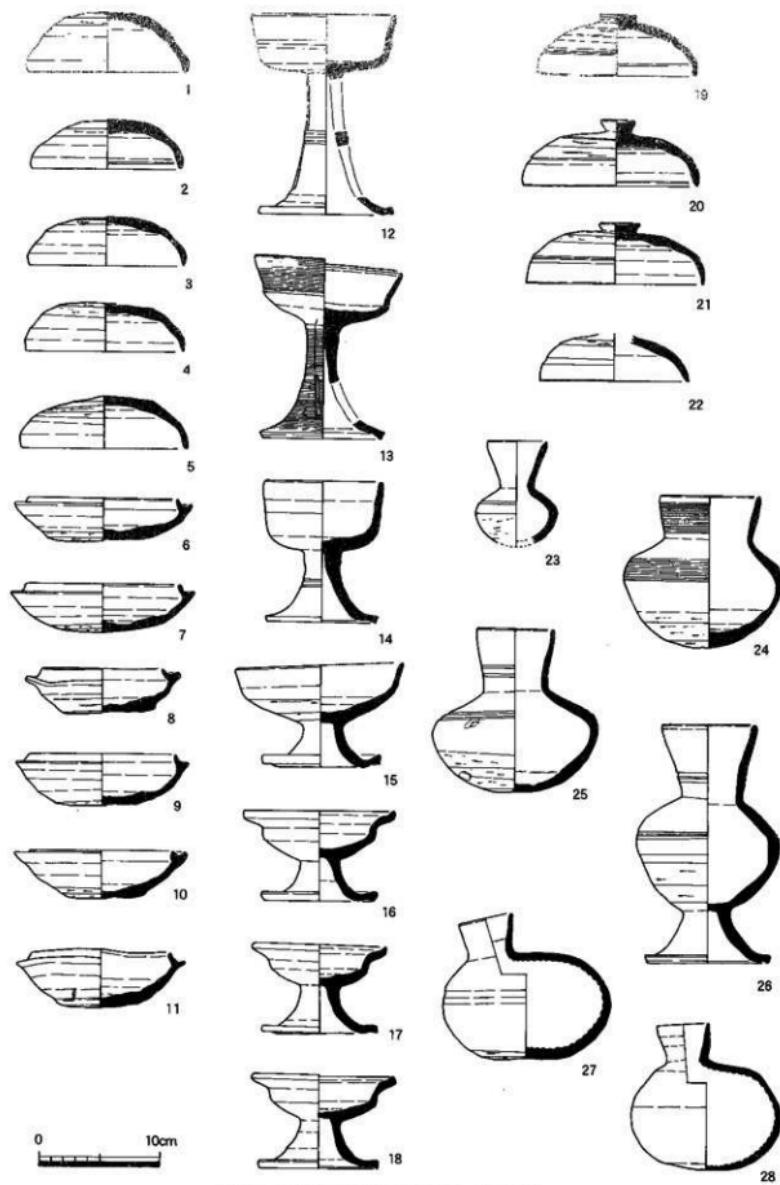
香川町立浅野小学校には、現在、香川町教委が所有している埋蔵文化財の一部が展示および保管されている。主に万塚古墳および劍山古墳から出土したものである。これら出土遺物については、今まで詳細な報告がなされたことがなかったため、今回報告するものである。

遺物の整理にあたっては、町教委が作成している『埋蔵文化財出土遺物台帳』に基づいた。台帳によると、浅野小学校保管遺物は、「万塚古墳」「劍山古墳」「八王子古墳・劍山古墳・万塚古墳」「東赤坂古墳付近」の4つに分けられている。このうち「八王子古墳・劍山古墳・万塚古墳」グループは出土地不明のものをまとめたものと推察できることから、「出土地不明」と読み替えた。遺物番号は、台帳に記載されている番号をそのまま踏襲している。また、今回の整理は、資料展示室のガラスケース内にある遺物を対象としており、ガラスケース下のコンテナにある細片は除外している。なお、台帳と一緒にある遺物写真アルバムによれば、(浅野)八王子古墳から出土した須恵器4点および劍山古墳No.15の須恵器が行方不明となっている。

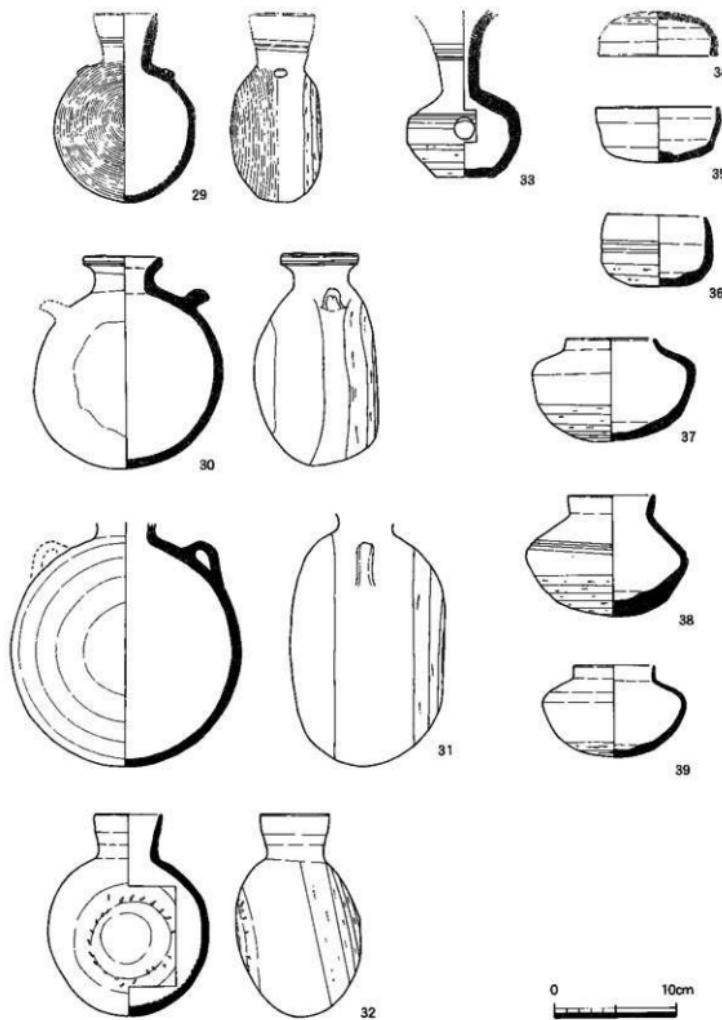
### 第1節 万塚古墳出土遺物(第8・9図)

万塚古墳は、正確には高松市仏生山町に所在した古墳である。古墳の詳細は、巻末に再掲した中原耕男氏が著した『万塚古墳発掘調査報告』にゆだねるが、片袖式の横穴式石室から多くの須恵器とともに耳環や鉄製品が出土している。

第8・9図に掲載した遺物は、すべて須恵器である。杯蓋(1~5)は、外面の稜も失われ、形骸化が進んだもので、口縁端部は丸く仕上げられている。口径は12.2~13.5cmを測り、器高の1/3~1/4が回転ヘラケズリで調整されている。杯(6~11)も、口縁部のかえりが短くなり、形骸化が進んだもので、口縁端部の段が失われている。口径は10.0~12.6cmを測り、器高の1/3~1/4が回転ヘラケズリで調整されている。無蓋高杯(12・13)は、長脚2段透かしのタイプで、杯部外面の段差がわずかに残っている。13の外面には丁寧なカキ目が施されているが、脚部の透かし上段は貫通していない。台付椀(14)は、グラス状の杯部に短い脚部がつくタイプである。無蓋高杯(15~18)は、短脚がつくタイプで、脚端部が反り返って地面に接しないものがある。このうち16~18は、杯部をS字状に屈曲させており、高松平野では通常見られない形態的特徴をもつ。高杯蓋(19~22)は、頂部に扁平な摘みをもつものであるが、この蓋と組み合う高杯は見られない。口径は12.4~14.8cmを測り、器高の1/3~1/2が回転ヘラケズリで調整されている。長頸壺(23~25)は、肩が張った球形の体部に、やや長い頸部が付くタイプで、体部下半を回転ヘラケズリで調整している。23は小型のものである。24は、一般的な長頸壺より頸部が太く、カキ目が外面に施されており、短頸壺と中間的様相を示す。台付長頸壺(26)は、短い脚部が付くタイプで、体部下半は回転ヘラケズリが施され、頸部と体部中位に沈線がめぐらされている。平瓶(27・28)は、やや扁平な球形に短い口頸部が片寄つて付くタイプだが、一般的な平瓶と比べて口頸部に比して体部が大きい。底部にのみ回転ヘラケズリが施されている。提瓶(29~32)は、扁平な球形の側面に短い口頸部と肩に把手が付くタイプであるが、様々な形態が見られる。やや大型で体部が扁平なもの(31)から小型で体部の球形化が進んだもの(29・32)、把手が環状のものから退化して消失したもの(31→30→29→32)、口縁部を外方へ屈曲させて端部を肥厚させるもの(30)から真上へ伸ばしただけで終わらせるもの(29・32)まであり、時期差を想定できる。29の表面にはカキ目が、32には刻目文が施されている。ハソウ(33)は、角張つ



第8図 万塚古墳出土遺物実測図① (縮尺1/4)



第9図 万塚古墳出土遺物実測図② (縮尺1/4)

た球形の体部にラッパ状に大きく開く口頭部をもち、体部中央に穿孔が見られるが、口縁部は欠損している。短頸壺の蓋(34)は、小型の杯蓋に似た形態だが、口縁端部の断面が四角で、外面に筋が残っている。杯(35・36)は、いわゆる杯蓋と杯の形態が逆転した時期以後のもので、36は深手で体部外面に沈線をめぐらし、底部には回転ヘラケズリが施されている。短頸壺(37～39)は、肩が張った球形の体部にごく短い口頭部が付き、底部は回転ヘラケズリが施されている。38は肩である最大径が体部中位まで降り、外面に沈線を施している。

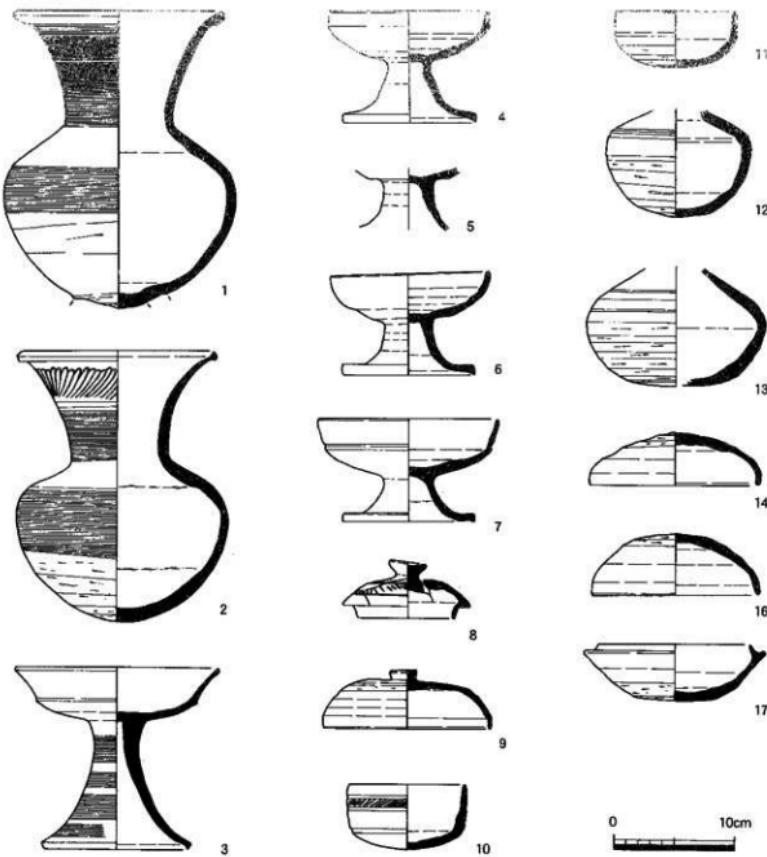
これら須恵器には、マジックでアルファベットが書かれ、または数字を書いたインデックスシールが添付されていることから、整理や貸出の際に注記がなされたと考えられる。一方、中原耕男氏の調査報告と比較すると、須恵器総数については報告では40点で現状では39点とほぼ数が合うが、器種ごとに見ると微妙に合わない。例えば、提瓶が報告では2点だが現状では4点あり、平瓶は報告では3点だが2点しかなく、高杯は報告では8点だが7点しかない。このため、現在は万塚古墳出土としている須恵器について、すべてを肯定することはできないが、後述するように一定の時期には収まるものであることから、一部(例えば20の高杯蓋)に他遺跡の須恵器が混入した可能性はあるが大部分は万塚古墳出土のものと考えられる。

さて、万塚古墳出土の須恵器は、大阪府陶邑編年(明治1981)のTK209～TK217段階に相当すると考えられる。細かい時期差が存在するが、これは初葬後の追葬により生じたものと理解でき、TK209～TK217段階という時間幅は横穴式石室出土遺物では一般的なものである。杯蓋・杯はTK209段階が多いが、8・10は口径が小さくTK217段階まで下ると考えられる。長脚の無蓋高杯は、TK209新相～TK217古相のものであろう。短脚の無蓋高杯は、脚部の形態からTK217段階と考えられる。提瓶については、30・31が古い様相を示しTK209より前のTK43段階まで遡る可能性はあるが、古い型式が踏襲されている可能性もあり即断はできない。29はTK209段階、32はTK217古相段階と考えられる。35・36の杯は、TK217段階のものであろう。短頸壺は、おおむねTK209段階だが、一部TK217段階まで下るかもしれない。

## 第2節 剣山古墳出土遺物(第10図)

剣山古墳は、香川町川東下に所在した古墳で、剣山から最も北へ伸びる尾根の先端付近に立地していた。現在の香川町総合体育馆から、道路を挟んだ南西方向にある。正式な調査がなされないまま消滅してしまったため詳細は不明だが、『讃岐香川郡志』(昭和1940)によれば、「川東村には大字下村劍山頂より北一丁ばかりの峯に、住民が昔から相傳へて由緒のある所であると云はれてゐる所がある。それは昭和七年に龍満忠義氏が其の一部を發掘した時、地下二尺許りの所から土器二箇が現はれた。一箇は破損し一箇は完全に掘出した。併し祟を恐れて發掘を中止した。蓋石等は散逸して存してゐない。側壁は石を以て築かれてゐる。」とある。

第10図に掲載した遺物は、すべて須恵器である。台付広口壺(1)は、やや肩が張った球形の体部に、ラッパ状に開く口頭部をもつが、脚部が接合面で剥がれて失われている。きれいに脚部が剥がれることから、焼成時等に失われた可能性がある。口縁端部は外側に肥厚しており、頭部には刷毛原体による押圧文が、頭部および体部中位にはカキ目が施されている。広口壺(2)も、1と同様に、やや肩が張った球形の体部に、ラッパ状に開く口頭部をもつ。口縁端部は内面上方に摘み出しており、頭部には押圧文が、頭部および体部中位にはカキ目が施されている。ほぼ完存している。無蓋高杯(3)は、ラッパ状に開く杯部に、透かしの無い長脚が付く。杯部外面には段差が残っており、脚端部は下



第10図 (伝) 刺山古墳出土遺物実測図 (縮尺1/4、横岡山古墳出土遺物含む)

方に摘み出してしっかりと接地している。脚部外面にはカキ目が施されている。無蓋高杯(4~7)は、短脚がつくタイプで、口縁部は上方にのび、脚端部は肥厚して反り返っているものがある。蓋(8)は、長頸壺の蓋の可能性があるので、かえりに長めの口縁部が付くとともに、大振りの摘みが付く。外面には、2条の沈線間に列点文が付く。焼成時に生じた亀裂のところで、2つに割れている。高杯蓋(9)は、頂部に扁平な摘みをもつものであるが、この蓋と組み合う高杯は見られない。口径は13.8cmを測り、器高の1/3は回転ヘラケズリで調整されている。杯(10・11)は、いわゆる杯蓋と杯が逆転したもののだが、両方とも深手で、10の体部外面には3条の沈線と列点文をめぐらしている。長頸壺(12・13)は、肩が張った球形の体部だけの破片である。肩に沈線がめぐらしている。杯蓋(14・16)は、外面

の底も失われ、形骸化が進んだものである。口径は13.8～14.0cmを測り、器高の1/4は回転ヘラケズリで調整されている。杯(17)は、口縁部のかえりが短くなり、形骸化が進んだものである。口径は12.8cmを測り、器高の1/3は回転ヘラケズリで調整されている。現在所在不明である杯(15)も、写真を見る限り17と同様である。

剣山古墳出土の須恵器を概観すると、大きさは2時期に分けることが可能である。古い時期のものは、台付広口壺(1)・広口壺(2)・無蓋高杯(3)・蓋(8)である。1・2の広口壺は、大阪府陶邑編年のII期に見られる器形で、口頸部に比して体部が大きく、体部の最大径も上位にあり、カキ目・回転ケズリも丁寧に施されていることから、II期でも前半(MT-15・TK-10段階)と考えられ、古墳時代後期前半である。3の高杯もI期の高杯の退化型式と捉えることができ、8の蓋も摘みが大きくしっかりしていることから、広口壺と同じ時期であろう。一方、これら以外の遺物はTK209～TK217段階(II期末～III期初頭)に相当し後期後半と考えられ、大きな時期差が存在する。後期後半の須恵器は、横穴式石室が普及したことから一般的に見られるものだが、後期前半の須恵器についてはそれほど一般的ではない。ここで『讀岐香川郡志』を再度検討すると、掘り出した時に土器1点は破損したが、もう1点は完全だったとある。台付広口壺(1)は破片をつなぎ合わせるとほぼ完形に復元でき、広口壺(2)はほぼ完形であり、『讀岐香川郡志』の記述と一致する。無蓋高杯(3)・蓋(8)の出土までは記載されていないが、1・2の須恵器については剣山古墳から出土した可能性が高いと考えられる。この場合、剣山古墳については、後期前半の築造時期が想定できる。

一方、TK209～TK217段階とした4～7・9～17の須恵器について考えてみたい。『香川町誌』(香川町 1970)によれば、横岡山古墳から出土した須恵器を復元したところ約十点あり、これらを町教委に保管していると記述している。地元の中原耕男氏も同様の指摘をされている。現在、横岡山古墳から出土した遺物については展示ケースにも台帳にも見られない。ただし、ここで注意すべき事実は、剣山古墳や横岡山古墳そして龍満山古墳群は同じ独立丘陵上に立地し(第11図)、この丘陵を地元の人々は住んでいる地域によって、剣山と呼んだり、横岡山と呼んだり、龍満山と呼んだりしていることである。すなわち、剣山古墳と横岡山古墳から出土した須恵器が、剣山出土として取り扱われた可能性がある。横岡山古墳出土遺物については、『讀岐香川郡志』によれば、昭和7年夏の開墾時に「一、頸飾玉(二箇) 一、銅鏡(三箇) 一、石斧(一箇) 一、鍛製劍(一振) 一、土器數十箇(但し完全なるもの数箇)」が出土したという。鎌田共済会郷土博物館には土器の内訳が残されており(香川町 1993)，第10図とは若干の矛盾がある。ただし、横岡山古墳は一般的な横穴式石室をもつことから、出土した須恵器がTK209～TK217段階の時期でも相違なく、剣山古墳の須恵器(4～7・9～17)の一部が横岡山古墳出土のものであっても矛盾はない。今後、更なる検証が望まれる。



第11図 剣山古墳周辺図  
(縮尺 1/10,000)

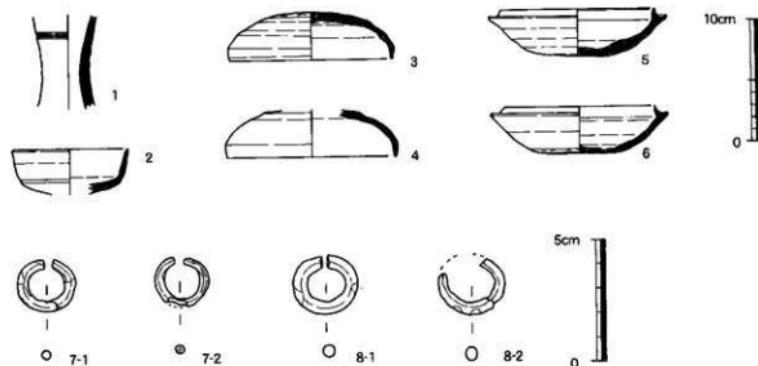
### 第3節 出土地不明遺物(第12図)

参考町の『須恵文化財出土遺物台帳』によると「八王子古墳・刻山古墳・万塚古墳」出土となっているが、個々の詳細な出土地は不明である。ほかに70点に分かれた鉄製品があるが、年代が進んでおり、図化が難しいことから今回は報告しない。

第12図に掲載した遺物は、須恵器(1~6)と耳飾(7・8)である。長頸壺(1)は、頸部の破片で、2条の沈線が見られる。無蓋高杯(2)は、おそらく短脚がつくタイプだが、杯部の一部しか残っていない。杯蓋(3・4)は、外面の稜も失われ、形骸化が進んだものである。口径は13.5~14.0cmを測り、器高の1/4は回転ヘラケズリで調整されている。杯(5・6)は、口縁部のかえりが短くなり、形骸化が進んだものである。口径は12.6~12.9cmを測り、底部は未調整と器高の1/4を回転ヘラケズリで調整されているものがある。耳飾(7・8)は、7が直径2.3~2.4cmと8の直径2.7~2.8cmに比べて小型であるが、金環である。7と8はそれぞれ二個一組となっているが、この組み合わせが出土時まで残るかどうか不明である。

さて、これら遺物の出土場所についてだが、須恵器(1~6)については特定できない。ただし、須恵器の時期については、大半が大阪府陶邑編年のTK209段階に相当するが、2の高杯についてはTK217段階まで下るものと考えられる。

一方、耳飾(7・8)については、万塚古墳と浅野八王子古墳から計4点出土していることが、中原耕男氏の報告によりわかる。調査報告に掲載された写真を見る限り、耳飾(8-2)は浅野八王子古墳出土のものと似ているが、詳細に比較すると同一とは断定できない。一方、万塚古墳の調査報告と他3点の耳飾を比較すると、直径は違うが厚さは一致しており、直径を外側で計測せずに内側で計測していたり誤植があったとすると矛盾はないようと考えられる。耳飾(7)が金環であることも報告と一致する。ただし、先述のとおり横岡山古墳から出土した銅環3点が浅野小学校に持ち込まれた可能性もあることから、これら耳飾が万塚古墳や浅野八王子古墳から出土したとは断定できない。なお、実測できなかった鉄製品についても、万塚古墳と浅野八王子古墳の報告書に鉄製品出土の記載があることから、両古墳から出土したと考えられるが、今後の保存処理等によって鉄製品の形態が明らかになった時に、細かな検討が必要であろう。

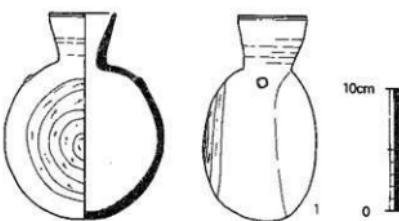


第12図 出土地不明遺物実測図(1~6は縮尺1/4、7・8は縮尺1/2)

#### 第4節 下赤坂出土遺物（第13図）

展示キャプションによれば、平成11年に香川町大字浅野下赤坂2375(田)において、発見されたとなっている。この地点は、比較的大きな横穴式石室をもつことで知られる東赤坂古墳（町指定）より、北へ約100m離れたところである。

出土した須恵器提瓶（1）は、扁平な球形に短い口頸部が付き、口縁部の一部が欠けただけで完形に近い。口縁端部はほぼ直立しており、肩の把手もボタン状に退化していることから、大阪府陶邑編年のTK209新相段階に該当すると考えられる。



第13図 下赤坂出土遺物実測図（縮尺1/4）

さて、付近に所在する東赤坂古墳は、出土遺物は知られていないが、横穴式石室の様相から古墳築造時期はTK209新相段階までは下らないものと考えられる。ただし、追葬がTK209新相段階まで行われていた可能性はあるが、今回報告した須恵器提瓶は東赤坂古墳より距離があることから直接関係がある遺物とは考えられない。一つの可能性として、提瓶出土付近に別の古墳が存在した可能性が考えられる。一般的に、この時期の横穴式石室をもつ古墳は群集することが多く、今後、東赤坂古墳近辺において削平された古墳の痕跡が見つかる可能性が高いことを、この提瓶は示していると考えられる。

以上、報告してきたように、浅野小学校保管遺物については、一部に所在不明や混入が認められるが、全体的には良好に保管されている。今後は、不明遺物の追跡調査や木箱に入った細片の整理、鉄製品の保存処理等が必要であろう。最後に、平成18年1月10日をもって香川町は高松市と合併するが、これからも貴重な文化遺産を大切に保存していきたい。

#### 《参考文献》

- 青井常太郎 1944『讃岐香川郡志』香川県教育会香川郡部会
- 井上勝之・中原耕男 1973『香川町浅野八王子古墳調査報告』『文化財協会報』第58号 香川県文化財保護協会
- 上原敏雄 2001『香川県香川町船岡古墳および周辺遺跡』『墳丘のない墓の探査研究』天理大学遺跡探査チーム
- 香川町教育委員会 2003『龍満山古墳群～1号墳～』
- 香川町史編集委員会 1970『香川町史』
- 香川町誌編集委員会 1993『香川町誌』
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 中原耕男 1971『万塚古墳発掘調査報告』『文化財協会報』特別号10 香川県文化財保護協会
- 中村浩 1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房

万源市出土遗物修复表(第8-9图)

胸膜炎のりは、熱病體水素で、

記録番号	学種名	原産地(都道府県)		外見	生態	A.士	分布	参考	
		品種名	品種名						
1	高麗人参 赤根	13.0	1.9	外側: 圆錐形ナリ、根頭部に4-5個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 赤い皮膚	少々細	F		
2	高麗人参 白根	12.4	4.0	外側: 圆錐形ナリ、根頭部に4-5個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	細	O		
3	高麗人参 白根	12.2	3.9	外側: 圆錐形ナリ、根頭部に4-5個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	細	G	11	
4	高麗人参 白根	13.0	4.0	外側: 圆錐形ナリ、根頭部に4-5個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	K		
5	高麗人参 白根	13.5	4.3	外側: 圆錐形ナリ、頂頭部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	N	11	
6	高麗人参 白根	12.6	3.6	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	A	3	
7	高麗人参 白根	12.6	4.0	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	F		
8	高麗人参 白根	10.0	6.0	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	K		
9	高麗人参 白根	12.2	4.2	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	中や粗	M		
10	高麗人参 白根	11.8	3.9	外側: 圆錐形ナリ、圓錐形ヘラカズリ、底葉不開裂 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	J		
11	高麗人参 白根	11.5	4.8	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	G		
12	高麗人参 白根毛氏	11.8	11.2	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	D	脚附: 比較2生、透かし2段2葉/肉	
13	高麗人参 白根毛氏	12.2	9.8	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	O	脚附: 比較1条、透かし2段3葉/肉	
14	高麗人参 白根毛氏	9.6	9.0	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	H	脚附: 比較2条	
15	高麗人参 白根毛氏	13.8	9.6	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	M		
16	高麗人参 白根毛氏	12.4	9.6	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	I		
17	高麗人参 白根毛氏	11.0	9.4	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	K	杯茎外側一跡側内面: 自然摺	
18	高麗人参 白根毛氏	11.6	9.8	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	K	杯茎外側一跡側内面: 異色摺	
19	高麗人参 白根毛氏	13.2	5.0	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	L		
20	高麗人参 白根毛氏	14.4	5.4	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	15		
21	高麗人参 高根毛	14.8	5.0	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	J	外側: 自然摺	
22	高麗人参 高根毛	12.4	4.8	(G.8)	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	G	
23	高麗人参 高根毛	4.8	8.8	外側: 圆錐形ナリ、底部に4個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	25		
24	高麗人参 高根毛	8.1	12.6	外側: 圆錐形ナリ、カキ目、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	O		
25	高麗人参 高根毛	6.4	10.4	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	L	外側: 自然摺	
26	高麗人参 高根毛	7.8	10.0	外側: 圆錐形ナリ、体被半平型輪ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	F		
27	高麗人参 平根	1.3	12.1	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	37		
28	高麗人参 平根	4.1	12.2	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	D		
29	高麗人参 平根	5.4	15.6	外側: 圆錐形ナリ、カキ目、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	K	脚附: 比較2条	
30	高麗人参 平根	6.4	17.5	外側: 圆錐形ナリ、裏側結合部、裏葉回転ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	I	口端崩壊・沈縛1条	
31	高麗人参 平根	12.5	16.7	外側: 圆錐形ナリ、裏側結合部、裏葉回転ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	H		
32	高麗人参 平根	5.9	16.7	外側: 圆錐形ナリ、裏側結合部、裏葉回転ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	44	脚附: 刻長目	
33	高麗人参 はうこう	4.8	13.0	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	中や粗	E	脚附: 比較3条 脚附: 比較1条	
34	高麗人参 別種類	10.0	3.6	外側: 圆錐形ナリ、底部に3個のハラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	M		
35	高麗人参 別種類	10.0	4.6	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	16		
36	高麗人参 別種類	13.2	4.7	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	F	外側: 口端摺	
37	高麗人参 別種類	7.4	8.8	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	中や粗			
38	高麗人参 別種類	7.3	10.0	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	G	脚附: 比較2条	
39	高麗人参 別種類	6.6	7.5	外側: 圆錐形ナリ、底部開裂ヘラカズリ 内側: 圆錐形ナリ	外側: 黄褐色の角質層で覆われた表面 内側: 白い皮膚	粗	H		

(伝)對山古墳出土遺物觀察表(第19圖)

品番	品名	規格(寸)	単位	仕 様		備 考	
				内面	外面		
1 1-1	茶漉器	17.0	(24.4)	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性 白色・耐候性	
2 1-2	茶漉器	16.0	22.2	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性 白色・耐候性	
3 1-3	茶漉器	16.9	12.0	15.0	外面:円筒形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
4 1-4	茶漉器	13.2	11.0	9.2	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
5 1-5	泡立器 高杯			(3.1)	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
6 1-6	泡立器	13.0	11.0	8.6	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
7 1-7	泡立器	15.0	11.0	8.5	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
8 1-8	泡立器	7.8		4.8	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
9 1-9	泡立器	13.8		4.5	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
10 1-10	泡立器	9.5		5.4	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
11 1-11	茶漉器	10.0		4.6	外面:圓柱形ナット 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
12 1-12	茶漉器			(8.6)	外面:圓柱形ナット, 体部下半円柱ヘラケツリ 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
13 1-13	茶漉器			3.0	(9.9) 外面:圓柱形ナット, 体部下半円柱ヘラケツリ 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白SY6/ 内面:白SY6/ 底面:白SY6/1	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
14 1-14	茶漉器	14.0		4.3	外面:圓柱形ナット, 底部1/4円柱ヘラケツリ 内面:圓柱形ナット, 底部1/4円柱ヘラケツリ 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
15 1-15	茶漉器	13.8		5.0	外面:圓柱形ナット, 底部1/4円柱ヘラケツリ 内面:圓柱形ナット, 底部1/4円柱ヘラケツリ 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白NT/ 内面:白NT/ 底面:白NT/	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
16 1-16	茶漉器			4.7	外面:圓柱形ナット, 底部1/3円柱ヘラケツリ 内面:圓柱形ナット 底面:14mmドリル カット穴, 周囲の凹面ヘラケツリ	外面:白SY6/ 内面:白SY6/ 底面:白SY6/1	高 高 耐候性 白色・自然色、耐候性 白色・耐候性
17 1-17	茶漉器						

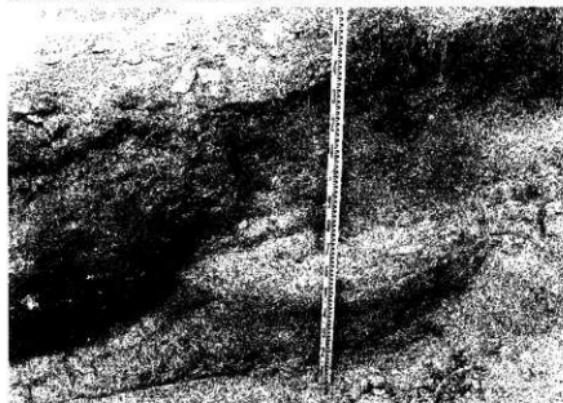
出土地不明遺物觀察表(第12圖)

### 下赤坂出土遺物觀察表(第13図)

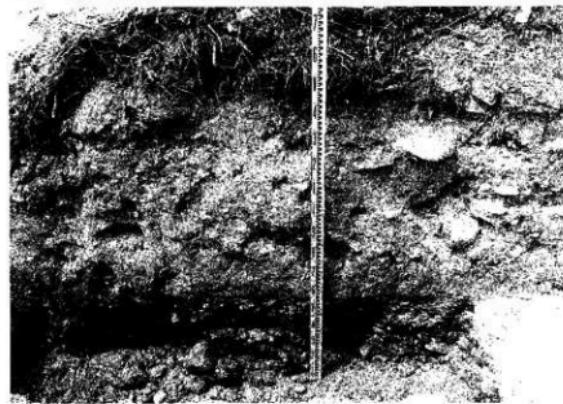
規格		寸法(cm)	構造	色調	地土	備考
品名	基種	上段 厚さ	下段 厚さ	表面	裏面	
1 吸盤器 板	吸盤器 板	5.5 13.1	部材別 12.1	外面:四輪ナット、表裏回転ヘラクゼリ 内面:回転ナット	外面:灰N5/ 内面:銀錫K5C4/1	密



1 墓丘・トレンチ  
全景（南から）



2 トレンチ西壁  
北端（東から）



3 トレンチ西壁  
南端（東から）



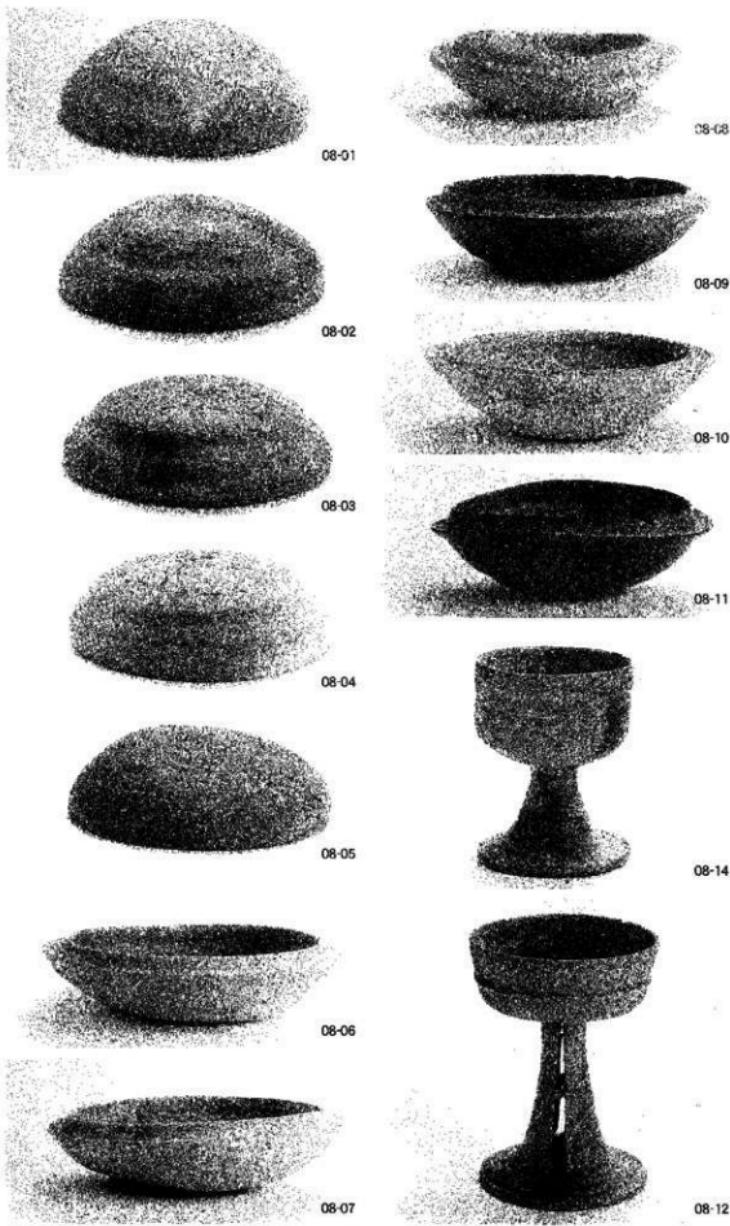
4 墓丘東斜面  
(南から)



5 石室検出状況  
(東から)



6 石室検出状況  
(南東から)





08-13



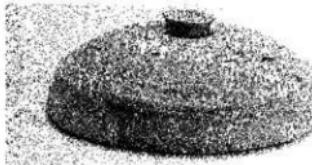
08-19



08-20



08-15



08-21



08-16



08-22



08-17



08-23



08-18



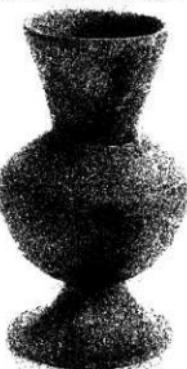
08-24



08-25



09-29



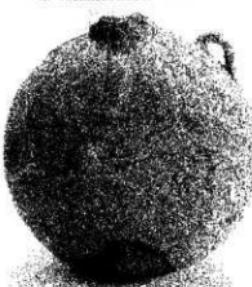
08-26



09-30



08-27



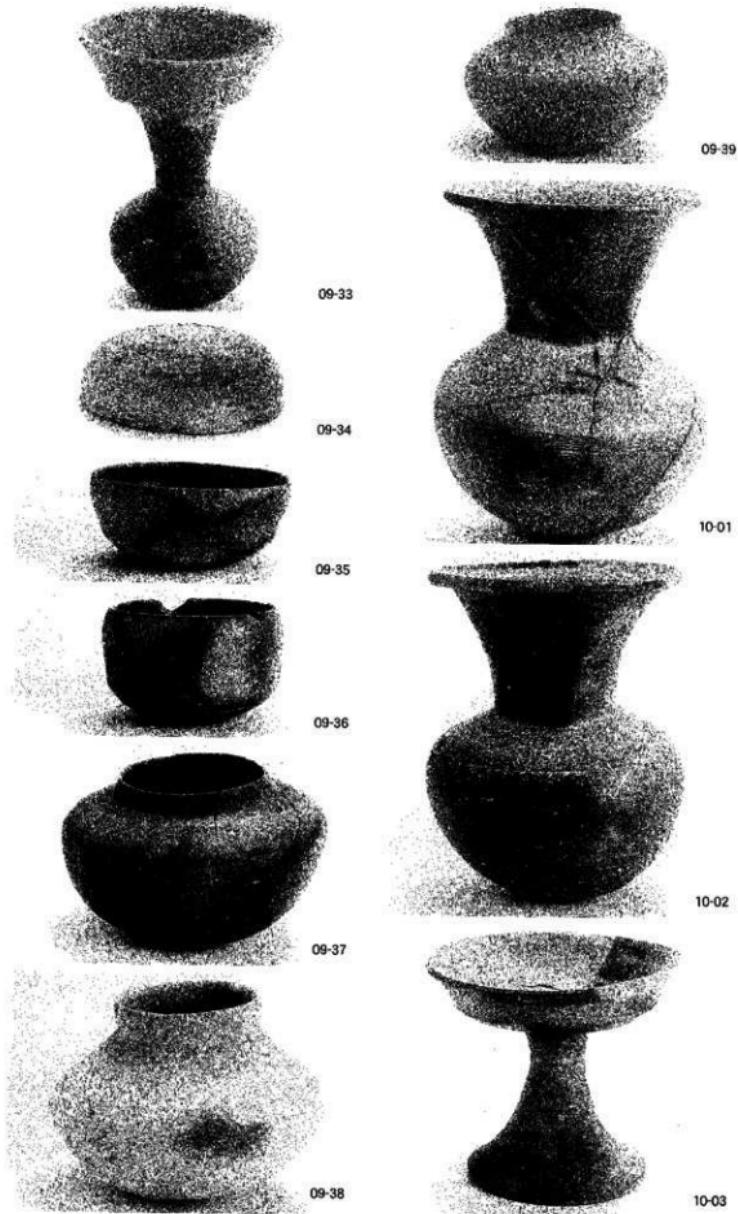
09-31



08-28



09-32





10-04



10-11



10-05



10-12



10-06



10-13



10-07



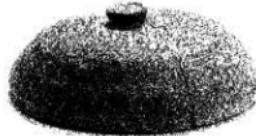
10-14



10-08



10-15



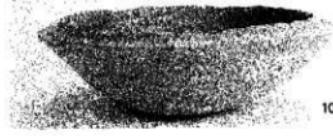
10-09



10-16



10-10



10-17



12-01



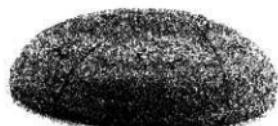
12-05



12-02



12-06



12-03



12-08

12-07



12-04



13-01



浅野八王子古墳出土遺物

四点が出土しておりその中の一つは、焼成のときに変形したらしく、全体に彎曲ぎみであり、焼きも悪く、粘土のような色調で胎土には砂粒を多く含んでいる。蓋受けのかえりの立ちあがりは垂直にちかく、全体としてはしないに作られている。蓋面部とレリーフ門わきに蓋がされたもので、胎土層の中にはつたもので、焼きのむぎがあつたのも知れない。蓋の部分は破片であるが、全形の察知できるものが一点があり、ろうの使用跡は明瞭で、内側のつくりは難に仕上げている。外周はよく整形がなされており、焼成もさまで良好である。

4. 風炉  
風炉は大抵して器台の部分が残っている。脚の部分は比較的薄く、横に広くなっていて安定した形をしている。焼成はよく、灰白色を呈している。

5. 切子五  
切子五は角形をしているが、各面の広さは一様ではなく、つくりとしてはやや難である。長さは一・七センチメートルで中央に貫通している穴の一方は後四・五ミリメートル、他方は三・三ミリメートルあり、中央がややくぐらんでいるようすが、 penetrating hole.

6. 瓶  
瓶がみがひどく、酸化の著しい瓶が一個のみ出土した。瓶の厚さは三・三ミリメートル、瓶の底は一・五センチメートルほどである。

以上のほかに、完全な形ではないが特色のあるものに、小玉と鉄製馬銜がある。小玉は小玉で溶けていたが、径八・二ミリメートルほどの墨玉で、径一・二ミリメートルほどの穴も通つてゐたようすがうかがえる。また、女帝の南西隅より、諸のひどい、鉄製の馬銜片が出土した。馬銜がはなはだしく、ほとんど小さくわれているが、一部にみられる曲線ならかに馬銜の馬銜という推定はできる。このほか、鉄製の錆らしいものも出土したが、大きさや形状は跡れないほど腐蝕している。

その他の漆器類は細片であるが、さわめて多數が出土した。その中には、环の破片に加えて、半瓶の口縁と思われるものや長頸瓶の頸部も混在している。さらに鏡片、小片ではあるが大きな盛の破片が出土している。表面にはくし目、裏面には間隔の狭い青苔紋がみられる。焼きはきわめて弱く、表面には自然釉がみられる。

など、この古墳の遺物として直接關係のないもので、次の二・三のものが出土している。すなはち、長さ四・五センチメートルの石ぞくや你生式土器片である。また、土器器片や文鏡、それに、乳白色を呈する瓦器片も出土しているが、それらは、床面よりも五十センチメートルほど上部から出土したものである。

#### 六、結語

弥生時代から開けたこの地域は、古墳時代中期の古墳も点在しているので、往時の人々の生活空間であったことはがしのばれる。やがて、古墳時代後期の横穴式石室頂と作られた当地の横穴式石室は、主軸式の多いことは、時期的な意味もある」とながら、地域的な特色と考えることができるのである。この八王子古墳は、現在でこそ独立した存在のように位置しているが、規模も小さく、丘陵の斜面部に在り、群集墳のうちの一基としての性格が強い。この丘陵上では他の遺構は発見されていないが、わずかに離れた万葉とのグループの中に位置づけることができる。この八王子古墳は、現在でこそ独立した存在のように位置しているが、規模も小さく、丘陵の斜面部に在り、群集墳のうちの一基としての性格が強い。この丘陵上では他の遺構は発見されていないが、わずかに離れた万葉とのグループの中に位置づけることができると思われる。

遺構部および墳丘については既に破壊されており、丘陵上の地形も著しく変化していて、この丘陵上の他の古墳群の遺跡は不明であるが、八王子神社の北あたりから須恵器片が採取されるので、花崗岩のみならず、川石も用いたことは、用石の不足によるであろうし、大規模に計画された土塁ではなく、家族的な色彩を持つていてそれを裏付けるものである。しかも、石室の美事半簡略化の方向に向かっていることを示している。

副葬品の須恵器の形式から、この石室内に葬られた時期は、少なくとも二期であったと考えられる。環と玉類の場所が異なっていたことも、その考へを否定はしない。須恵器の組合が施していったことは、當時整理されたといふよりもむしろ、石室内部が擾乱されたためと考えられる。漆器の退化して、形式化された耳や、小形の耳は、後期古墳期でもその終末に近いことを示している。

立地として、丘陵の東、北、西が利用できるなかで、あえて西斜面の上部に築いたことは、この古墳に關係の深い焦急の範囲を限定させるものがある。

以上略略な記述で、充分な考察もできないが、とりあえず、八王子古墳の概況の報告にかえたい。

註 1 『万葉古墳発掘調査報告』 文化財監査課特別第十一号

註 2 香川町史

註 3 香川郡史

註 4 『大正にある』「二の古墳に就いて」黄泉園の典藏記載  
文化協会報特別第三集

### 二、古墳の立地および周辺の遺跡

この古墳は、標高で七十メートル、比高では一メートル余りの、なだらかな丘陵の西側の山腹に位置する。安山岩の風化した、赤褐色の土壌より成るこの丘陵の面積は、小さな谷をなししており、西側の谷は灌漑止められて溜池となっている所が、この上方に三箇所ある東側の谷には溜池は作られていないが、東西両谷の水は下流の大きな平地に集まる。この山腹は、弥生式土器片およびサカイの石鏡、石碑等、弥生時代の遺物の散在地であり、現在でもその採集が可能である。この東側に八王子神社が祀られていて、地名に八王子が當たられている。

この位置から北方には平野がひらけ、西へ約一キロメートルで、香取川岸に達する。北方の平野部には条里地相を認める事ができるが、南および東には、なだらかな丘陵が続き、徐々に高さを増して山がちな地形に変わり、平野は少ない。

この古墳から北東に六〇〇メートルのところが、平池の南東岸附近にあたりそこが万塚と呼ばれている所で、かつては多くの塚があったと言い、そのうちの一ヶ所は昭和四十五年に発掘された。この万塚の古墳は、全長七メートル、片袖式の横穴式石室墓である。また、南東一キロメートルあたりには、北西六・八メートルの、片袖式にちかい形の横穴式石室墓もある。<sup>(2)</sup> 北西には舟岡古墳、舟岡山古墳が望まれ、<sup>(3)</sup> 舟岡山古墳群を造営する事ができる。なお、この学校の校庭には、かつて同村で出土して舟岡路の橋に使われていた元形の劍拔式石棺が保存されている。<sup>(4)</sup>

#### 附 石室（古墳主体部）

玄室を西に向いた横穴式石室で、主軸は丘陵とほぼ垂直に交わる。玄室は、幅一・七メートルのほぼ正方形で、奥行きは三・二メートルを計る。高さは、天井石および側壁の崩落のもの不明である。玄室は南側の壁のみが突出していて右袖式を示している。北側は、玄室をとおして壁はほぼ一直線をなしている。玄門あたりの袖部での幅は、一・〇メートル、その長さは一・三五メートル程である。葬道のうちは、北側には一個の壁が残つてしまひ、南側には石列が欠け、その幅や長さは不明である。現在残っている葬道部最西端の石列までの長さは、五・一メートルある。葬道部に残る一個の大石の端から南側に、四枚舟のつなぎとしとんの縁上に、七センチメートルのコンクリート壁が地中深く埋まつていて、(1)より西の葬道部の遺構はない。

玄室に開いた穴、南壁と西に一個残つており、鏡石の高さは一・一五メートルである。玄室の基礎はほとんど四十センチメートル内外の、さして大きくなかった。側壁には内壁もしくは外壁も使われたらしい。所々の壁に円錐の詰めおよび、明らかに壁として積んだと思われるものもある。なお、床面に一部壁として築かれていた円錐が残れたものが、玄室中央あたりでは床面の壁が三重になつていた所があつた。

た。先述鏡石の幅は一・一メートル程度で、奥壁を埋めつくすことは出来ないが、南東側の奥壁部分には、基礎も根石群もない。

また、南東側の側壁は奥壁のものが側壁の横にまで伸び、一般には、鏡石の両方から側壁が押される形をとっていることは一般的であり、当初、北東側の側壁を鏡石で鋪設したやえんもいに違いない。しかも、鏡石は床面下まで伸びて埋まっているが、北東側壁は三個の石の上に積まれた状態で築かれている。玄門にある巨石は、いずれも其基礎より一つの石で成り立つていて。

床面の石はほんとん、川より運ばれたらしい。一十メートルセメント繊の円盤がならべられている。また、大きいのは四〇×三〇センチメートル程度のものがあるが、一〇センチ内外のものも混在している。ただ、所々に、安山岩の角のある敷石もいくつか並べられていた。玄門あたりの中央部には石列があり、壁のほかにはそれもなく、粘土で固くからめられていてようすがうかがえ。玄門あたりで出土した須恵器の环は、いずれも圓い粘土層の中から單独に出土し、まわりには敷石らしいものもなかつた。

なお、玄室内のおもな遺物は床面より上、または敷石列の間より出土し、敷石の間および底盤から見つかったものに、鉄製品と玉類・耳輪がある。なお、玄室部の圓い粘土で固められたと思われるあたりから、土師質の土器の碎片も一部混じっていたが、さわめて破損でぐるにこわれたほどであった。こには、とき火の跡とまでは断定できなかつたが、大川郡発掘された古墳の例<sup>(5)</sup>が想起されるので附記した。

#### 五、出土遺物

ほぼ完全な形で出土したもの、および、復元により形の判別できる遺物は次のとおりである。

##### 1. 掘出し物

口縁部は径一センチメートルでややゆがみがあり、高さは一・一セントメートルで、全体の形はよく整っている。脛のくらみは、直徑九・五センチメートル、短径六センチメートルで、ろう使用のあとが鮮明にみられる。両脛の耳は小さく、三ミリメートルほどの半球の突起でできている。焼成は良好だが色調にはむらがあり、一方は灰白色、他方はねずみ色をしている。

##### 2. 坂

口縁三・五センチメートル、高さ七センチメートルほどで、器形は葵型、ゆがみは感じられない。口縁部にわずかに欠損箇所があるのであるのみである。全体が濃いねずみ色を呈し、ろくろの使用跡も明顯に残っているが、底部のつくりは雑で、形状がなされていない。

# 香川町浅野八王子古墳調査報告

井上勝之 中原耕男

【香川県文化財保護協会「文化財調査報 第58号」より抜粋】

所在地 香川県香川郡香川町浅野三八七の一

調査期間 昭和四十七年十一月六日～昭和四十八年二月三日

調査主任者 香川町教育委員会

## 四 次

はじめに

調査までの経緯

二、墳場の経緯

三、古墳の立地および周辺の遺跡

四、古墳（丘頂主体部）

五、出土遺物

六、結語

## はじめに

この古墳は、香川町立浅野小学校の運動場南端の端にあり、外見上では既に原形をとどめなくなってしまい崩壊していた。古老たちの話で古墳らしいことがわかつていてが、近くに体験者の説教が行われることになつたため、古墳の実態がわからぬまま消滅するところを免れましたし、発掘調査を試みることになつた。

昭和四十七年六月二十七日、香川県教育委員会を通して文化庁に発掘申請を提出した。同月二十九日付で文化庁より許可を得たので、発掘調査を実施した。  
調査は、香川町教育委員会が主体となり、香川町教育委員会職員、香川町立浅野小学校職員、香川町立香川中学校教諭中原耕男、香川大学教育学部附属風呂出中学校教諭井上勝之が請けた。また、浅野小学校原宿の有志も、率先して発掘に協力した。

この古墳の所在地は、もと、井上喜五郎他二名の民有墓地であったが、浅野小学校校地拡張の必要から、大正十五年、近隣にあった旧浅野村有地との交換協定が成立し、浅野小学校の敷地の一部となつた。その折、墓地にあった平保一年や延喜二年等の刻銘のある墓碑は、交換地に移されたが、この古墳はそのまま残された。そして、某家の祖先の墓だという伝承もあって、一部

では墓碑の対象ともなつてゐたところであるが、いつの間にか忘却された存在となつていた。

このようないきさつから、発掘に先立つて、慎重を期すために、香川町教育委員会は藤田市氏らが、交換協定の事情説明と確認するために、旧墓地所有關係者の面談交渉に奔走し、旧墓地跡の発掘の了解を得た。昭和四十七年十一月六日、神事のあと開始し、昭和四十八年二月三日まで発掘調査は、昭和四十七年十一月六日、神事のあと開始し、昭和四十八年二月三日まで断続的に実施した。

二、発掘の経緯

学校園の中に、あたかも庭園として配列したかのように、三個の巨石が孤立して、墳丘はおろか石室の向きさえも判別せしむ配列でした。

発掘は、内部と思われる所の土を除くことから始め、堀り進むうち、一個の巨石は天井石の崩れこみで、原形を失ってしまいました。それをとり除いて堀り進むうち、新しく一個の巨石があらわれた。北隅と東隅の石の組み合せから、南向きの横穴式石室であるうと予見して作業を進めていたが、南面延長のトレンチは、地表より五十七センチメートルあたりで土を固い地層ににまきあたり、明らかに地山の上であることがわかり、発掘場所を西へ広げることにした。

南面にある巨石は全く無く、石室の内部と思われる所から、旧校舎の残骸や焼却したと思われる瓦のなごりながら、八十センチメートルほどの深さが続いていた。これは、発掘初期の旧校舎建設および、その解体の時点で、古墳の石圓いが腰斧斧鋸の場となつていた事情を示して、やがて、灰の層に混じって、瓦器系の上蓋片が多くあらわれてきたが、これらは、墓地時代の遺物だと思われる。

そのうちに南側の石列もほぼ現われて、片袖式の横穴式石室であることが判明した。前述の灰の層が終つて、セメントチャーミー土が粘土質で埋り下げるが、川原石の層がはじめた。しかも、この後も土質が變化して、二つから床面までの調査のために、以後ほとんど毎日数が費やされた。この層になつてから、土師片・須恵片が多く出土し、ほぼ完全形で提瓶・壇・切子玉器・一個も出土した。異色のものとして、石鎚一個と石器用材のナヌカイト片數十個、赤生式土器片數個も出土した。ただし、これは附近に頗る古墳の生遺跡があり、そのあたりの土を運んで古墳を築造したためであると考えられる。

玄室内部に敷きつめられた敷石面まで掘りそろえ、ここで敷石列を実測した。さらに敷石列の底から土器一器を持て石室内の作業は終了した。表面部には旧校舎のコンクリート壁がうたれ、墳丘はすでに無く、周囲も運動場整地などで回塙は範囲すらつかみ難く、この段階で調査を終えた。

い。しかしながら、この地域の鉄製武器の形態を知るうえに貴重な資料にならぬことはない。なお、木の付箋が残されている鉄片などがあるが、今後時間をかけて調査し、記録する必要がある。

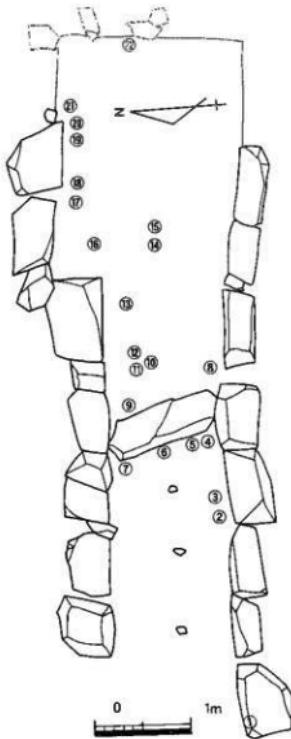
### 5 展示

「つらがい」の交わるところに付ける飾りである舞珠と止金および方形の飾り五個である。舞珠は径一・八cm、飾りをくみめた長さは九、四cmである。四方の脚に怪しきの凸部が、繋づつ配されている。止金は長さは五、五cm、幅二・四cm、厚さ〇・八cmである。馬具の飾りは、「七切」と「二重の短形が二個」、「八角の方形のもの」が三個あり、中央部に高さ一・四cmばかりの宝珠のような凸部がある。たぶん鹿革かしりがいの飾りであろう。

### 四、おわりに

「万摩古墳について概要を記したといふのであるが、從来万摩の地名はよく知られており、ここに古墳が群集をなしていたであろうことは考へられていたが、その実態は不明であつた。まことに今回の調査で、たゞ一基だけではあつたが、古墳群の一端でも知り得たことはありがたいことであった。

さてこの古墳は片袖式の横穴式石室の構造をもつており、この規格が貧弱であることが、他の本格的な様相をうけとることができる。  
古墳については発掘ながら側壁の大半を破壊され、根石と第一石程度がみられたにすぎない。しかし床面の保存状態は良く、副葬品を多数得られたことは本古墳の資料的価値を高めている。



第2図 平面図と出土位置



第1図 本遺跡および周辺遺跡の所在を示す地形図

- |         |         |
|---------|---------|
| ● 万摩古墳  | ○ 東赤坂古墳 |
| ○ 油山古墳群 | ○ 横岡山古墳 |
| ○ 舟岡山古墳 | ○ 舟岡古墳  |
- ※地図は昭和 56 年のものを使用

測量の石垣は、表道、玄室ともに長さが約八五四～三〇一程度の石材を横にして一列に並べてあり、玄室の一部の石間に粘土で埋めてあつた。東壁は側壁より小さい石を縱に一列に並べられていた。

つまに表道であるが、南側壁端の石より西へ約一、二〇一mの地点で少しづかく下つていて、これは標高したが、どのような設備がなされていたかはわからなかつた。

床面の裏蓋は仕切石から奥へ五〇、五、北側壁より二、〇mの位置で床面上から約一〇cmの層位から鐵器、陶器が発見された。その一個の間隔は約一〇、九m南北に並んでいた。さらに一個が南側の床面の位置より南へ約七〇、〇mに寄つたところで発見された。この一個の金蓋をどう解釈すればよいのだろうか。

&lt;/div

【香川県文化財保護協会「文化財協会報 特別号10」より抜粋】

岡田の万葉と同じ時期に、この地域にも群集墳がつくられていったものと考えられる。しかし、現在は「はずれも残されていない」のが現実である。二の古墳からその地名をつけて、「弓

冢古墳

٢٦٣

畢竟と保存はいよいよ問題化しているが、この小さい一戸建てをもつて通学する十才木の娘（さくら）になつた。この占領の発見は、道路工事用の土を採取をしていたといふ。畑（栗原園）は、（吉野）の所有者であつた多田町一が須藤要一個を見つけたことに始まる。それは年の瀬ぢやねに重いた昭和四十四年一月下旬のことであつた。發見者はなんどかに香川県教育委員会より警戒監視駐在官で、知らせを受けた香川県教育委員会では、すぐに筆者に調査を命ぜられた。そこで現場におもひいて、踏査をしたところこれが古墳の遺構の一部であることを認めた。そして香川町教育委員会と打ち合わせた結果香川町教育委員会が墓室を保有となり、土石移築の連絡状況からみて、昭和四十五年一月十・十一日に緊急調査として発掘することになった。発掘者は香川町教育長二川一川、同教育委員会主事佐藤武氏の両氏と筆者があたり、署名をばらめとする地元の方々や香川第一中学校社会科クラブ員十数名の協力を得て発掘を

卷之三

1 万塚古墳の位置

わが町の教育者として、西田一川、美、同教委員会主事として藤原氏の兩氏と姓名があたり、碧雲寺をはじめとする地元の方々や香川第一中学校社会科クラブ員十数名の協力を得て発表を

### 三、発掘の経過と概要

「一ツ星山の上」では高松市（仏生山町三二—一〇—四四番地）となつてゐるが、香川町大字浅野町の東側から西北へ十數メートル北に寄つた所に、繁榮駅、赤坂宿の東相寺宿留所西側の役所跡ならぬで、五〇メートル北に海行き詰めた所に位置する。西は高松城の御殿跡である（然しがあり南東に、実相寺（海抜一〇〇メートル）があり、西は平池に突き出た所に位置する（「一〇〇メートル」である（地図中印地図））さらに遠くを眺めると島々のほか瀬戸内海を望むおさめる）ことができる。この景勝地の自然丘を利用して古墳を築き上げた民人の姿が歴史をさだすための筆著者ひとりではなかつたであらう。

「この付近一帯は「万葉塚」という地名が示すように多くの塚があつたらしい。土地の古老の話では築作年位によく石にあたり、その築度石を振り出していたとのことである。また、埋葬さだすための筆著者ひとりではなかつたであらう。

「この付近一帯は「万葉塚」という地名が示すように多くの塚があつたらしい。土地の古老の話では築作年位によく石にあたり、その築度石を振り出していたとのことである。また、埋葬さだすための筆著者ひとりではなかつたであらう。

墳丘は存在したかもわからぬが、現地に睡んだるとは、写真1にみられるようすで上位部分はすべて削り取られて、石碑の最下部の石だけしか残つていなかつた。したがつて古墳をとりまく形や外観や記録などることはできなかつたが、地元の人の話では古墳のあつた部分は少し高くなつており、大きいつがわ切り出たといふ。

「川教育長のくわ入れ式後、ただに石室の全姿みきわめることから作業を始めた」地質が旧斯波式地層植物の砂砾交り粘土であるだけに作業は思うようにはかどらなかつた。それだけにこの墳丘の築造に動員された多くの古民農民の労苦をしのばずにはいらねなかつた。

石室は主軸をほぼ東西にとり、葬道の長さは墓室端より仕切石の中央部までが約一〇三メートル、一〇四メートル。玄室の長さは仕切石を含めて奥壁までが二・九八メートル、幅は袖柱部の二・九〇メートルで、八〇・四メートルと北側壁部の二・九〇メートルで、八〇・四メートルと南側壁部の二・九〇メートルで、八〇・四メートルと左側壁部の二・九〇メートルで、八〇・四メートルと右側壁部の二・九〇メートルで、八〇・四メートルとなつてゐる。しかし、鹿島郡北側壁と玄室の石組の一部が取り去られていたので正確には測定ができなかつた。なお、仕切石の長さは最長部で一・一〇メートル、幅は最も広いところで一・一三メートルであり、底面は地山の上に直接置かれてあつた。

## 報 告 書 抄 錄

舟岡古墳

附 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査

編集 香川町教育委員会

香川県香川郡香川町川東上 1865 番地13

発行 香川町教育委員会

発行日 平成 17 年 12 月 16 日

印刷 有限会社 中央ファイリング